真宗と真宗学

金子大榮

この題目に応えるものは二つありまして、一つは、『教行信証』によりますれば、「大聖の真言」「大祖の解釈」ということ。「大聖の真言」は、すなわち、『三部経』であります。お釈迦様の御言葉ということである。「大祖の解釈」は、すなわち、七高僧の解釈であります。その、お経に説いてあることが真宗であり、そのお経に説いてあることを領解し、解釈されたのが、七高僧でありますから、その解釈は、すなわち、「学」であると言うことができる。だから、真宗とは、『三経』に説いてあることであり、真宗学は七高僧によって行われたということであります。もう一つは、真宗というものを開いた者は、法然上人である。「真宗の祖師は親鸞である。」と、こう、思うておりますけれども、それは間違いというわけではないにいたしましても、それは親鸞その人の心持ちではない。そうしてみますれば浄土真宗を開いた者は、あくまでも、師匠の法然上人である。『高僧和讃』を読んでみましても、浄土真宗を開いた者は、法然である。『教行信証』でも、

真宗興隆の大祖源空法師

と、こう、言ってあります。この気持ちはずっと伝わっておりまして、恐らく、ずっと徳川時代までも、浄土真宗というものは、法然上人によって、興隆されたのであって、親鸞は、いわばその浄土真宗の宣伝者に他ならんように考

えられておった、と言っていいんでしょう。『御伝鈔』を読みましても、真宗を開いた者は法然であります。『歎異抄』も、だいたい、「親鸞によって浄土真宗というのは開かれた。」というふうには考えておらないんでしょう。蓮如上人につきましても、「聖人一流の御勧化のおもむきは」と言うてあります。こうしてみますと、親鸞一流では信心が大事であると伝えておるのである、ということでありますから、真宗を開いた者は、法然上人である。そして、それに対して、それを自分の身につけていく、それを本当に我がものにしていこう、ということのために親鸞は努力した。そういう意味において、真宗学というものは親鸞によって道が開けたのである。こういうことであります。と申しましても、この二筋のことは、いずれ一つになるんでありまするが、本日はまず、真宗を開いた者は法然上人である、ということから出発していこうと思います。

そこで、真宗を開くということは、いったいどういうことであるか。それは、「浄土教の独立」ということであります。法然上人までは、「寓宗」という言葉がありましたね。付け足りの宗旨であります。仏教の本筋道は聖道の修行であるが、その聖道の修行を満足するためには浄土往生ということも必要である、ということで、仏教から言えば、本筋の道は聖道であり、その聖道の満足の為に往生浄土ということも大事なことであろう、という意味におきまして、寓宗として、念仏往生ということがずっと伝わったのでありまして、それは何も珍しいことじゃないと言っていいんでありましょう。いわば、学問するのには田舎に居っては充分じゃないから、京都へ行って勉強しようというようなもんでしょうね。この世では本当に仏道修行はできないから、お浄土というところへ往って、そうして修行しよう。修行満足の為に浄土往生、ということであります。しかし、その寓宗という考え方でない、浄土教は浄土教であるということであってですね、仏教に聖道門というのと浄土門というのは、それは全く別のものである、ということを明らかにしなければ、「独立」ということは言えないのであります。法然上人は、そのことを実行したのであります。『選択集』を読んでみますと、聖道教と浄土教というのがあるが、そのうち、聖道教というのは、時代にも間に合わ

ない。時代の救いにもならない、だから、もう、時代の要求に合わない。『選択集』の言葉を用いますれば、

大聖を去ること遥遠なるに由る

お釈迦様が亡くなられてから、もう、随分長い年月が経って居る。仏教、仏教と言うても、もう、時代の要求に合わない、ということであります。今も、ここへ来る前に『選択集』を読んできたんでありまするが、今の言葉で申しますと言うとね、聖道門というのが時代の要求に合わない。こういうことであると思うのであります。ところが、「合わない」と言った浄土教が「今日の時代に合わない。」というようなことを言われておるようになったんですけれども、「時代に合わない」という、こういう考え方というのは、私達大いに参考にしていいんだろうと思います。法然上人は、はっきりと、時代の要求に合わない、と。

大聖を去ること遥遠なるに由る

それから、

理深く、解微なるに由る

大乗教、「華厳」だの、「天台」だの言うてるけど、あまり奥深いことをおっしゃるので、甚だわかりにくい、これも言ってしまうと、「わしにはわからん。」ということでしょうね。「わしにはわからん。」ということであろうと思います。それで、「独立」ということの考え方の上におきましては、聖道門では駄目である、「時代の要求に合わない。」ということで、つまり、聖道教と浄土教というものの、間が切れたんでしょうね。「断絶」ということがあります。その「断絶」ということが、話は横へそれるかもしれんけれど、仏教というものの上において、少しは考えられるのであります。いったい、「仏教というものは何であるか。」ということを明らかにしようとすれば、まず、お釈迦様の原始仏教から、どうして大乗教になり、それから、どうして浄土教というのになったのであるか、と。こういうふうに、釈尊の昔から法然、親鸞の終わりまで見て行くという、こういう、一つの見方があるわけであります。そして、

そういう見方をする人の心持ちの中には逆もあるのでありまして、法然、親鸞から遡って、そして、釈尊の精神に行くんだ、ということがあるのであります。これはねえ、私等のようにしばしば書物を書く人間にもよくわかるんでありますけど、貴方達も書物をお読みになるにおいてもわかるんでありまするが、「前書き」と「後書き」というのは、あれはどう読むんでしょうかね。「前書き」と言えば、「序文」であります。「後書き」というと、「いわれ書き」となるんでしょうかね。しかし、「前書き」が「後書き」、時間からいうと、「前書き」が「後書き」である、ということは考えられますな。みんな書いてしもうてから、それから「前書き」して、この書物は、こういうことを明らかにしようとしたんだと。本当は時間的には「後書き」なのが、書物となると「前書き」になる。『教行信証』などもそうでないかと思いますな。いったい、「総序」の文というのは、『教行信証』を書いてしまってから、あれをお作りになったんですか。あれを書いてから、『教行信証』をお書きになったんですか。どちらだとお思いになりますか。まあ、そういうことを誰か知りたい人は、書誌学の上からいうとわかるかもしれんが、まあ、どうも、やっぱり、時間的に言うと、『教行信証』を書き終わってから、お書きになったもののように思えるわね。しかし、「総序」もね、「まず、こういうことを書きたいんだ。」ということを「序分」に書いて、それから『教行信証』を書いたんだとも思われる。けれども「後序」というもの、「後書き」というものを読んでますと、あれが実は一番先なんであって、で、『選択集』の精神というものを明らかにしたい為にこの本を書いたんである、と。「序文」を書いて下さいと頼まれて、「後書き」がにされる、いうことがあるんでありまするが、これは「後書き」前にあったと同じようにですね、「仏教の歴史を読む」と言いましてもね、誰もがお釈迦様から大乗教、それから、浄土教と、歴史というものは、こういうふうに見なきゃならんものでしょうかな。或いは外国人の仏教研究は、そういくかもしれんけども、東洋人には、ことに、仏教を伝えてきた東洋人にはそういうことは出来ないことなんであります。実は、そういう腹の底にはね、逆があってですね、そして、こう、遡って行くという、遡りつつ読み下していくということがある。それから、書物とい

うのは、何度も読まなきゃならない。一遍でわかるということは思想だけわかる。だからお釈迦様から、大乗教を経て、そして、浄土教を読んでいくには、仏教思想とは何ぞやという、仏教思想はわかるであろう、一遍で、頭のいい人ならね。けど、仏教精神ということになると、「逆」を読まなきゃならない。もう一遍やり直し。その時に、後から前へ。『教行信証』でもそうですよ。まず始めからしまいまで読む。そうすると『教行信証』の思想というものがわかる。そして今度は、後からまた遡って読む。ここに精神というものがわかる。しかし、思想がわかり、精神がわかってもそれが本当に自分のものになるということになると、何べんも何べんも読んでみなきゃならないものがあると思います。反復して。だから、「経教は鏡の如し」、しばしば読み、しばしば学んでいけば、「智慧」が増進して、そして、ついに「涅槃」にいたることができると言うてあります。一遍でわかるというようなことは、頭がいいかしれんけれども、頭のいい人には仏教思想がわかっても、仏教精神はわからない。反復して初めて精神がわかる。更に更に読んで読んで、自分のものになっていく。自分のものになってくるということは、永遠なるものがですね、仏教の力を得て、始めから終わりまでという、思想を超えて、そして、永遠なる「まこと」というものがわかるにちがいない。したがって、「独立」ということは、つまり、歴史にしたがいながら、歴史を超えていくようなものがあるのでありましょう。私が言いたいのは、今日の時代ということも、自分の頭の中には、問題になっておるんでありまするが、つまり、法然上人の浄土教というものは、そういうような意味におきまして、歴史的に見ることはできない。歴史的に見ていって、「こうして、法然の浄土教が出来たんだ。」というようなことが言えないふうに、「断絶」がある。大乗教から浄土教への「断絶」がある。そこに、思想的なつながりが、「無い」とは申しません。頭の良い人が読めばわかるんだろう。けれども法然上人の、その人の心持ちになれば、そこに「断絶」がある、「飛躍」がある。だから、聖道より浄土へ、と言う訳にいかない。それから聖道教の頭で、浄土教という根性はわからない。浄土教は浄土教として。したがって、聖道を捨てて、浄土に帰さなきゃならない。ですから、仏教の歴史の中から、真宗の在

り方を見出そうとすれば、やはり新しい意味において寓宗でしょうね。浄土教というのは仏教に属するものである。だから、時によれば非仏教である。「法然の言うようなことは非仏教である。」とさえ思われたに違いないようなものがあったのでしょう。しかし、法然からいえば、それは時代には間に合わない。聖道教は時代に適わない。聖道教の応用としての、浄土教でないということを明らかにするということがなければ、「浄土教が開けた。」ということは言わない。それが法然上人によってはっきりと説かれたのが、『選択集』であります。したがって、「捨てよ」、「聖道を捨てよ」と、そして、「浄土に帰せよ」と。「廃立」ということがありまして、一切、聖道門的な、その要求を捨てて、「浄土教」に帰さなきゃならん、という「廃立思想」というものがありまして、それで、法然上人の言い方が、かなり鋭かったんであります。今時になって聖道門なんていうのは時代はずれであるし、「そうでなきゃならん」ていうことを言うのは、これはもう、「群賊悪獣」である、と。二河白道の時には、真言だの、天台だという人は「群賊悪獣」であるというような、それはそれで、「どうかなあ。」と思うような言葉まで使うて、言ってありますことは、そう言わなければ、「浄土教は浄土教である。」という、そういうことがはっきりしないからなんでありましょう。したがって、この浄土へ往生する道は念仏である。念仏というものの意義が、ひとつ、変わってこなきゃならない。恐らく聖道門の人でも、寓宗というのはあったんですから、聖道の修行を満足するためには、浄土往生しなきゃならない。浄土往生するためには、念仏が大事である。「資格」だからね。阿弥陀仏の国に行くのは資格がある。大学へ入るには、大学の最小限度の資格がある。我が名を称うる者を我が国に迎えよう、というのが仏の本願なんだから、そういう趣旨で出来た学校なんだから、だから、その最小限度の、（最小限度っていう言葉は悪いかな。）精進というのがあってね、その精進にさえしたがえば、その学校へ入ることが出来る。お浄土へ往くならば、「念仏する者を我が国に迎える」と言うてあるんだから、極楽という学校へ往く時には、念仏というのは精進、精進として念仏を称えなけりゃならない。そら、まあ、どんな偉い人でも、往生するということになれば、浄土の人間に成りたいんならば、念仏

しなくちゃならないんだということであったんですからして、したがって、称えなきゃならないが、よろづの善を積めば、学校へ入る精進が決まっとりましても、例えば、高等学校を出るということが、学校へ入る精進であると決まっとりましても、そのうえできればなお結構じゃないか、ということであったんです。が、法然上人では、「そうじゃない、そうじゃない、念仏よりほかに往生の道はないのである。」こう言わなきゃならない。念仏よりほかにあるんじゃない。ほかにあるのは、要するに聖道門の応用として、浄土を願うということであって、「浄土を願う」ということは、念仏よりほかにないんである。だから、念仏を浄土の行とされた其の本願の意（おこころ）から言いましても、そこに二つの意義があって、一つは、難を捨てて易を取る。易行であるから。『選択集』の説明を見ますと言うと、何故、念仏を以て往生の行とされたんであるか。と、こう申しますれば、これがいちばん「易行」であると。「易行」であるからっていうことは、そこには説明してあったと思いまするが、なるべく多数の人をというのが、これが浄土の願いであるからして、念仏よりほかに、たやすい道はない。

あのねえ、僕の話はちょっと連想的になるかもしれんけどね、例えば、学校でもね、大谷大学でもね、しばしばこういう問題があったんです。いったい我々の学校は少数の天才を教育するのか。或いは多数の凡人を作るのかという、少数天才主義と言うのと、それから、多数凡人主義というのがあってね。もう、先生の名前までは申しませんが、学校のことを心配せられてた先生方にはね、少数でいいから、天才の偉い人間さえできればいいんだから、そうだから、できない奴は出来ないでかまわんから、できる奴だけ育ててぐんぐん偉いのにしたらいいんである。というような少数天才主義の学校であると。また一方ではそうじゃない。大勢あればいいんだと。だから、凡人でも何でもかんでもいいから、とにかく大勢であったほうがいいんじゃないか。勢力というのは、一人でも二人でも偉い人間がいるというところに宗派の面目があるか、それとも気のいい連中が多数おるというところにあるか。こういうようなものなんです。

法然上人では、弥陀の本願はそんな少数の天才の者を要求しておらない。多数の凡人、一切衆生。名利を離れてというのは偉いかもしれんけれども、それは「悟り」というのであって、仏教の願いは多数の者、群萌の者、できれば一人残らずさとりの境地にあらしめたいということこそ、如来の本願でなくてはならないんではないか。ということとともに、もう一つ、「勝劣の義」というのがありまして、念仏にまさる道はないということに、なんか、「家の譬え」が出ておったかね、「部分と全体」というようなものである。そらまあ、色々な善があるであろう。布施、持戒、忍辱、精進、禅定、というような色々な善があるだろうけれど、その善は全て部分的なものである。総合的なもの、いわゆる普遍的なもの、つまり、易行の中のそういう徳を持ったものこそ念仏である。だからして、念仏こそ、浄土往生の行である。ということを言おうとするのが、それが『選択集』でありまして、『選択本願念仏集』と題し、

南無阿弥陀仏　往生之業
念仏為本

と、こういうふうに述べた、法然上人のお気持ちがあるわけなんであります。これによって、つまり開教ということは、真宗という宗教が開けたということが、わかるわけであります。ところで、それが、法然上人の教えだけで、本当に徹底したであろうか、という問題が出てくる。法然上人の教えを聞いた人々の中には、その念仏しておる様子ということは、それ自体易行であるということは、どんな人でもわかったんでしょうねえ。そして、念仏を称えて浄土へ往くということは、それは、念仏する者を迎えるというんだからして、それはよくわかるんでしょうね。けれども、念仏にまさるものがないという、念仏以上の善がないんだという、これは、或いは、今でもわからんのかもしれません。私には、何かそういうことはねえ、法然上人の時代も今もたいして違ったことでないように思うのであります。「ただ念仏」「ただ南無阿弥陀仏」ひとつが、全ての人間の救われる道である。そして、「これよりほかに道がないのである。」、というようなことがわからない。だから、「他の善も要にあらず」ということがわからない。そりゃまあ、

なるべく多数の人間を救いたいということが、それが、本願の御意趣であろう。けれども、いかなる罪の深い者もということはどこまで言えるのであろうか。やっぱり、善を欲しい、善を修する者こそ、そこに浄土へ往く者でなくてはならんという、そういう寓宗的の名残りがねえ、やっぱり、聖道教から展開した浄土教である、だから、浄土を願う者は聖道的な精神がなくてはならぬという、そういう、聖道教に対する名残りっていうのが、聖道教に対する執着っていうものが、法然上人の門下の人々にも、又、それを見ておる人々にも、あったに違いない。聖道門の人々は、「群賊悪獣」だと言われたり、「そんなものは時代遅れだ。」と言われたりして、だいたい腹立って反抗して、まあ、それが普通であったんでしょう。けれど、また、真面目な人もおって、「法然の言うことも、一応もっともじゃないか。」と。けれど、聖道門が無用だという法然の宗旨っていうのは、そこにはですね、菩提心もいらないという。聖道門というのは、菩提心を発して道を求めて修行する。だから、菩提心なんかいらない。「上求菩提　下化衆生」なんて、そんなこと、ナンマンダブツを称えていればいいんだ、ということが、いかない。それは、いかない。だから、「念仏ひとつ、念仏ひとつである。」という、法然の教えは同感することはできるけれども、「菩提心も無用である。」と言うてみたり、「諸善万行などはいらんものである。」と言われるということは、少し言い過ぎではないか。というふうに考えた人もあった。まあ、栂尾の明恵上人、あの人の『摧邪輪』という書物を愛読したんですが、今はもう、愛読しましてもみんな、忘れてしまいます。年寄らんこっちゃねえ。まあ、僕みたいにどっか間違って年取ってしもうたんだから、今から文句言うてもしょうがないですけど、まあ、年は寄らんことじゃ。今朝もお内仏でお勤めするのにねえ、「願以此功徳」を忘れてしもうた。「願以此功徳　平等施」と言いましたけど、それから、もう、忘れて言えない。「願以此功徳」を忘れるようでは困ったもんであるが。こういうふうに、大事なことを言うのを皆忘れてしまいますから。けれども、『摧邪輪』は愛読しましたけれど、なかなかいいこと、書いてあります。同情してね。法然上人の言うことはごもっともである。他の人々は、「法然はけしからん、けしからん。」と言うけれども、わしはそ

ういうことは思わなかった、けど、「菩提心がいらない。」なんて言うと……。ということで、法然に同情しつつ、それを批判した人もあります。或いは、貞慶、解脱上人なども、その一人であったかもしれません。とにかく聖道門の人々でも、法然の言うことに、半ば賛意を表しておった人もある。けど、その賛意を表する、ということは、寓宗思想、浄土往生といいますことは方法である、ということに同感しておるからでありましょう。法然門下の人々も、どうもそこで躊躇しておる。足踏みをしておる。そりゃまあ、浄土往生ということは「念仏ひとつだ」とこう言われることもわかるけれども、「念仏ひとつ」よりほかない、と言うてみたところで、「菩提心がいらない。」とか、或いは、「善を修することは無用である。」ということ、そういうことまで言わなくてもいいんじゃないか、というのが西山、鎮西、九品等、長楽寺というふうなですね、色々な宗派に分かれたという、それは皆、結局、浄土教というのに入りましても、その中において、聖道思想をどっかで復活させようというものであるに違いがない。今でもありますかね。この学校では、西山、鎮西、「西、鎮、今」と称しまして、西山派と鎮西派の祖師の書物と、それから、親鸞聖人のお書きになったものとを比較してね。そして、

道理を明らかにしようとする学問がありました。私も面白いことだと思います。なにか、こう、基礎付けようとする。今日でも、浄土教の基礎付けをやろう、と。仏教的基礎付けをやろうとする。こういうふうなことは、西山、鎮西、というふうなものであったに違いないのであります。そういう意味では親鸞もその一人であったんだと、こう言ってもよいかもしれません。しかしながら、親鸞の願うことは、どうしたならば、法然上人の言われるとおりに、それを徹底することが出来るであろうか、と。

そこで、私は、『選択集』を真宗の書物であり、そして、『教行信証』というのは、真宗学であるとこういうことを言おうとするのであります。

そこで、残されておることは、いったい何であるかということは、浄土というものの意味、浄土というものの意味

というものを明らかにしていかなならんのであろうと思います。浄土というものは、そこで修行して、さとりを開くという場所であるならば、如何に法然上人は浄土教立教と言われましてもね、そこへ往って修行をする、修行の場として浄土往生を願うならば、やっぱり、寓宗でないであろうか。それから、寓宗であるということは、「浄土往生」という、浄土そのものの意味、「浄土とはどんなところであるか」ということを明らかにしなきゃならないということが、ひとつあると思うのであります。

さあ、ここへきますとね、実際、往生浄土よりほか道がないと言われた法然上人にも、ちょっと、わからんところがあります。やっぱり、寓宗でないということを極論しようとなされた法然上人でも、その「寓宗」っていう、その考えは当然捨てられた。捨てられたんですけれども、「浄土とは何であるか。」ということの問いがどこまで明らかになっておったのであるか。明らかであったんだろうけれども、それを明らかにしなきゃならんという、そういうことがあるんであります。これは余計なことを言うようでありますけれども、いったい、何の為に浄土へ往生するんですか。という問いをひとつ出してみる。「いったい、極楽で何をするんですか。」そういう問題だねえ。まあ、学生の時分にねえ、よく、先輩にそういうことを問われたもんであります。面白い問いでしょ。「往生浄土」「往生浄土」と言うけれども、いったい、「浄土往生」、何しに往くのか。こう言われると、どうなんです。いったい、「往生浄土」って、何のために往生するのであるか。

昔読んだ落語ですがね、落語でもなかなか面白いことがある。ある禅寺に小僧さんが居ってね、小僧さんが、笊持ってね、そして、外へ出ようとした。そうすると門番がからかうんです。「小僧はどこへ行くんや」と。そしてもう一回聞いた。「お前何処へ行くんや。」と。それに対して「買い物に行くんや。」と応答した。そしたらまた、「何処に行くんや。」と尋ねてきたので、「遠くへ行くんだ。」と応答した。必ず回答せんならん。これに迷惑した小僧さんは、「遠くへ行くんはよろしいですけれど山門への回答が嫌で何とか名答はありませんか。」って、和尚さんに相談した

ら、「ああ、それはなんでもないんや。」いうことだった。「どこへ行く」って言うたら、「西方へ行く」て、はっきり答えよ、と。（笑）「西方の何処に行く」って言ったらば、「極楽へ行く。」ということで、それで済むんだ、と。それでもう、

「えらい、小僧が出てきた。」ということで、門番、口閉じてしもうて、もう何も言わないから、と。「ああ、そうですか。こりゃ、いいこと聞いた。」ってことで、彼はねえ、門を出たんだ。そうすると、「小僧、どこへ行く」って言うから、「西方へ行く」と。ほんとびっくりしてしもうて、「こりゃ、えらいことを言う。西方のどこへ行く。」「極楽へ行くんや。」と。それで済むことだと思うとったのが、なんせ、達磨ですからねえ（笑）。それで「極楽へ、達磨に会いに行くのか。」って言ったら、「豆腐買いに」（笑）と。そこで豆腐買いになってしもた、と。これ、冗談ですけどもねえ。しかし、面白い話じゃありませんか。おじいさんやおばあさんをつかまえて、「貴方達、お浄土へ何しに往く。」って言ったら、まさか豆腐を買いに行くとは言わないけれども、まあ、そこはわからない。「結構な処らしいですな。」ということでしょうが、その「結構な処」って、いったい、どんな処であるか。ということになると、法然上人でも、源信僧都でも、少なくとも庶民である、或いは、庶民の代表をしようとするところの、私達にはわからない表現がしてあります。源信僧都も、「お浄土へ何しに往くんですか。」と言うと、「そりゃ、文殊だの、普賢だのと、偉い人達とお付き合いできるからなあ。」というお答えです。こりゃ、『往生要集』にはっきりこうなってますわねえ。もうひとつ、皆さんは学問してるんだから、「お浄土へ行って何するか。」というと、「カントにもヘーゲルにも会える。」そんな訳のもんかねえ。法然上人もかつて、「貴方お浄土へ何しに往くのですか。」といったら、「お浄土へ往けば、此の世でいくら研究してもわからなかった真言宗の法もわかるし、天台の一心三観もわかる。」と、どっかに書いてあります。そうすると、やっぱり、寓宗じゃないかなあ。で、試みにそれを親鸞に向かってですね、「貴方は浄土へ何しに往くのか。」と、何という返事が出てくるのかなあ、ということですなあ。

そこにねえ、初めて差別を超える。聖者だの、愚者だの、指導者だの、非指導者だの、男だの、女だのという、そういう、分け隔てをして居るということは、悲しいことではないであろうか。浄土は涅槃の境地であるから、そこに往けば、一切平等であって、全ては、皆、こう、ひとつになって。もっと具体的には、此の世においては、東本願寺だの西本願寺だのと、ごつ、ごつ言わねばならんが、浄土へ往けば、そういうことは全て一如のさとりが開けて、大涅槃の境地が開ける。往生即成仏であって、そして、還相回向、「おもうがごとく衆生を」済度することができる。だから、還相回向てなこともですね、往生浄土の喜びとして、出てきたものにちがいないんであります。ここまでいかなければ、だから、

七宝講堂道場樹
　方便化身の浄土なり

と、これがどうもねえ、お経そのものから言えばわかりませんわ。『大無量寿経』から言えば、七宝、講堂、道場樹のあるところ、そこがお浄土であります。そしてそこに阿弥陀仏が説法なさる。みんなそこで聴聞する。こういう世界があるということは、仏法を求むる人間としては、当然のことでありましょう。しかし、そういう世界すらも、化土であると否定しているね。「七宝講堂道場樹　方便化身の浄土なり」と、こう言い切って言おうとするところに、浄土の在り方というのをひとつ明らかにしていかなきゃならない。法然の教えにおいて浄土教が本当に独立するためには、その在り方というものを明らかにしなきゃならない。同時に念仏というものの在り方、念仏というのは資格であって、念仏を称えない者は浄土へ往けない、無資格者であるということだけでなしにねえ、それよりほかに道はないのだということ。それよりほかに道はないのであるということは、それはつまり、「称える」ということは、願力の回向であって、いかに最小限度の資格であると言うてみましても、「念仏をする」ということの、或いは、「本願を信ずる」ということが、こちらからのはたらきであるならば、それが本当に普遍的な意味を持つことは出来ない「如

来回向の法」であって、「本願力回向」であるというところを明らかにしなきゃならない。と、いうふうなことが残されておる問題なんであります。したがって、これがですね、親鸞におきては法然上人の教えを本当に学んで行くということは、そういう必要があったのである。こういうことで、『教行信証』というものは、その内容から申しますれば、法然上人の教え、それに少しも違うたものでないけれども、どうも、法然上人の言葉だけでは、もうひとつ身につかないものがある。スッキリしないものがある。それを身につけていこうとしたものが、『教行信証』である。こういうようなものにしたがって、真宗の聖典は『選択集』であるとすれば、『教行信証』は、すなわち、真宗学を顕したものである。こういうふうに考える事が出来るのでないであろうか。勿論、真宗を離れて真宗学はないでありましょうし、また、真宗学を離れて真宗というのを理解出来ないのでありましょうからして、敢えて言う必要もないんでありましょうけれども、それをことをわけてみますれば親鸞の歩いた道は、「真宗は真宗学である。」と言っていいのでありましょう。私は三十五歳であったかな、この大学の教壇に立ったのは。そして、四十代の、ですから、無論大正の時期でありますな、初めて単科大学というのになった。それまでは宗門の一つの学場であったんですが、単科大学ということになった。その時に文部省のほうから、「いったい、浄土真宗というのは、お念仏申せばお浄土へ往くという宗旨で。だから、どうしてそんな、そういう学校に学問がいるんだ。」という、学問無用論が文部省から出たことがあります。「真宗において学問とは何ぞや。」という問いであります。先輩がみんなおられたんですけど、別にそういうことに対して答えようともなさらない。ちょっと私は行き過ぎで、しばしば、「真宗学とは何ぞや。」という問いに答えてきました。そして今日は、「親鸞聖人が真宗学徒であった。」ということに、なにかしらんけど、力強いものを感ずるんであります。そうでないとねえ、金出して、大きな学校建てて、いらんことやってるようなもんで、お念仏称えてお浄土へ往く人さえできたらいいんじゃないか。それを何故学問するんだ、と。けれど親鸞が学者であったならばねえ、当然、大谷派もいいんじゃないかねえ。『教行信証』を研究するということが、それがやがて

人生の学である。親鸞教学と言いましても、「親鸞という人はこういう人であった。」ということだけを明らかにするのではない。特に私はそうなんかもわからんけれどもね。どうなんでしょう。学問ていうのは、それを身につけていくということであります。そして、一時学校を出たんでありますが、その時に、非常に尊敬しておるところの、私にとって忘れてはならない先生がおられまして、その人がこういうことを言われました。「君がいけない。君は自分を通さなければ、精進できないんだから。」と。こう言われました。お偉い人が言われることですから、そういうものかなあと思っとりました。そういうもんかもしれませんね。今でもそれが問題でしょう。親鸞の研究は親鸞の研究でないか、そうすれば親鸞の時代はこういう時代であった。こういう背景があったと。親鸞その人がわかればいいんでないか。親鸞の道は、すなわち、我が道であるということになると、なにかそこに、ちょっと金子式みたいになっていやしないかとこう、言われるかもしれません。しかし、そこに学問というものの本当の意味がある訳であります。「親鸞を研究してよかった。」ということは、「私の人生が無駄ではなかった。」という喜びでなくてはならない。「人と生まれた甲斐があった。」というものと結び付かなきゃならない。そうでないというと、やっぱり、なにか向こうにおいたものになる。こういうことを言われた先生もおられます。「金子がけしからんのや。いったい、真宗の教えは愚夫愚婦の教えである。おじいさんやおばあさんの教えをインテリのものにしようとするとはけしからんことである。」これはどうもね、どういうようにお感じになりますか。なるほどそういうふうに見るとそういうものかもしれませんね。けれども、ご自分もインテリなんだからなあ。「いやだ。」と言われても、インテリはインテリです。教育を受けております。色々な書物を読んでおります。したがって問題はインテリがどうして愚夫愚婦の法を領解するか。愚夫愚婦の為の教えだということはね、外にあるんじゃなくてね、自ら愚夫愚婦の一人である、と。自分は愚夫愚婦の一人に過ぎないということが、インテリにもわかるんでなくちゃならない。そうでなければ、真宗の教えは、インテリの前で大きな声で話ができないということになる。しかし、そこになにか問題があるのでしょう。こういうよう

なことで、『教行信証』は、真宗学というものを開いてくれたんである。だから、我々が真宗学を、『教行信証』を研究するということは、真宗学を学ぶことである。真宗学を学ぶということは、他ならない自分の道を学ぶことである。親鸞という人はこういう人であった、というふうに説いて下さることは、ありがたいことでありますけど、そしてそれが「あなたのためには」、ということにならないと言うと、本当に「学」というものにならないのでないであろうか。「親鸞におきては」と、「親鸞がこうだ。」と、こういうふうに身につけていくために、『教行信証』というものはできたのである。というところに真宗学の意味というのがあるのであるということがある訳であります。

こういたしまして、今日申しましたことは、浄土真宗というのは法然上人によって開かれたものである。そして、それは、寓宗思想からの独立。したがって、どこまでも、仏教精神を発展したものでなく、なにかそこに断絶的なものがなければならない。それが廃立ということである。そしてそこに念仏というのは、浄土往生の資格というようなものでなくて、それ以上他に道がないんだ、涅槃の道はないのである、さとりの道というのはないのである、というところになければならない。そして、それが徹底しないために、法然さんの思想に同情しつつ、本当に、浄土教であることができなかった聖道門の人々もあり、また、法然上人のお弟子でありながら、まだ、聖道門に対する余習が解けなかったということは、遡ってゆけば、法然上人の教えそのものの上にも、もうひとつ整理をして、もうちょっと、徹底しなきゃならんものがあったんでないであろうか。これは、言い換えれば、浄土教の意味、そして、念仏というものの内容というものに関することである、ということであります。

こういうことで、第二話で、真宗は『三経』によって説かれ、真宗学は七高僧によって成し遂げられた、というところへ、問題を移していこうと思うのであります。

そうして、これから話す事は、当然、今申しましたように、『教行信証』で答えていきたいんでありますが、今回は、三帖の和讃において、『浄土和讃』『高僧和讃』『正像末和讃』という、『三帖和讃』の概要を語りつつ、今申しま

した、親鸞にとって浄土真宗というのはどういうものであったか、ということを明らかにしてみたいと思うのであります。はい、今日は、まあ、これくらいにしとこう。

執筆者住所が掲載されているため
リポジトリ非公開とする。